



統計から社会の実情を読み取る

第147回 コメ好き・パン好き・麺好きの地域分布

本川 裕

Honkawa Yutaka

アルファ社会科学(株)主席研究員

■東京大学農学部農業経済学科卒。財団法人経済研究協会常務理事研究部長を経て、現職。元立教大学兼任講師。農業、地域、産業、開発援助などの調査研究に従事。現在は、「社会実情データ図録」サイト (<http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/>) を主宰するかたわら地域・企業調査等を行う。著書に、『統計データはおもしろい!』(技術評論社、2010年)、『統計データが語る日本人の大きな誤解』(日本経済新聞出版社、2013年)、『なぜ、男子は突然、草食化したのか:統計データが解き明かす日本の変化』(同上、2019年)等。PRESIDENT Online にて連載を執筆中。



東日本の麺好き、西日本及び東京圏のパン好き、遠隔地のコメ好き

ギョーザ日本一をめぐる宇都宮、浜松、宮崎の競い合いなど、家計調査の地域データに基づいた話題がメディアやネットを騒がせることが多い。しかし、家計調査データの加工の工夫によっては、食べものの単品の消費が多いか少ないかというよりは、もう少し大局的な日本人の地域的な食の好みの傾向を明らかにできるのであるが、この点についての分析例があまり紹介されていないのは残念である。

我々が食べる炭水化物の3大食品は「米」と「パン」と「麺」である。そこで、今回は、家計調査データを用い、米かパンか麺かという食品間の嗜好の違いを地域別に明らかにした全国分布マップを作成した。

家計調査によると穀類に対する年間支出金額(2人以上世帯における2019～21年平均)は、米が2.3万円、パンが3.2万円、麺が1.9万円と合計で穀類全体8.0万円の93%を占めており、まさしく3大炭水化物というべき存在である(残

りは、小麦粉やもちなどである)。

いずれの金額が多いかで地域を区分すると、麺好きの地域はやや少なくなってしまう。そこで、ここでの地域区分は、それぞれの品目の支出額の都道府県ランキングを算出し、最も順位の高い品目で各都道府県を区分するという方法を採用した。なお、家計調査では県庁所在市の値しか得られないので、それを都道府県の値と仮定している。

何らかの理由による単年の変動の影響を避けるため3か年平均の値を対象とし、以上のように区分した結果で色分けした分布図を図1に掲げた。参考のため支出額の多いトップ10の表も付加しておいた。

描いた統計地図を見ると、東日本(北海道を除く)では「麺」、東京圏と西日本では「パン」を好んでいるという大きな地域分布が明確である。米どころとして知られる東北や新潟がむしろ麺好き地帯であるのはやや意外である。東日本の西端は富山、長野、愛知のラインとなっている。

一方、「米」は、北海道、沖縄という日本列島の両極、及び西北陸、そして静岡から和歌山、高

知、南九州に続く西南暖地で好まれている。

もっとも、飛び地がある。西日本の中でも讃岐うどんがソウルフードとなっている香川と出雲そばが特産の島根は「麺」好きに区分される。また、麺好きの東日本の中でも群馬は「米」好きに区分される。

こうした分布の由来を探るため、この3品目の県庁所在市別の支出額構成比を1960年代前半と比較した図2を掲載した。

全国的に、米中心だった食生活から小麦粉を使ったパンや麺を大きく取り入れ、食生活が多様化した様子が明らかである。

パンはもともと横浜や神戸といった国際港湾都市や東京などの大都市、及び岡山、広島といった西日本で多かったが、その後、食生活の洋風化とともに全国にパン食が拡大した後もこうした地域性が保たれている。

東日本の麺好きも以前にもその傾向が多少あったが、近年になってより明確になっている。

「米」好き地域については、かつては全国的に米中心だった状況から、パン好き、麺好き地域が明確になる中で、遠隔地ではかつての特色をなお残しているととらえられよう。西南暖地とも言うべき地域がなお米好きということからは、気象上の米栽培の適地だという要因も作用している可能性もある。

さらに言えば、東北が米どころとして発展したのは明治以降の品種改良などで寒冷地でも米栽培

消費支出額トップ10

	米	パン	麺
1	北海道	兵庫	山形
2	静岡	京都	香川
3	福井	岡山	岩手
4	沖縄	滋賀	新潟
5	石川	東京	青森
6	山形	神奈川	秋田
7	長崎	石川	神奈川
8	群馬	大阪	福島
9	大阪	奈良	富山
10	新潟	徳島	栃木

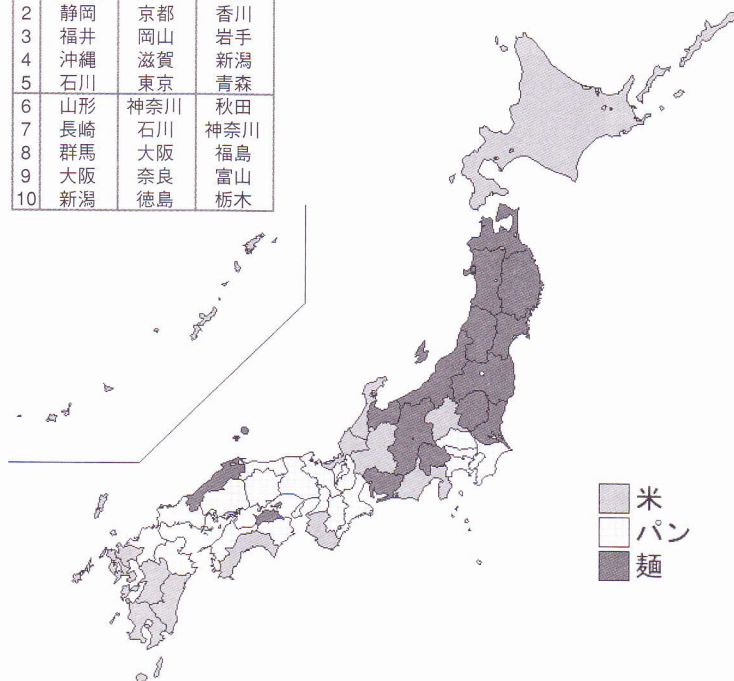


図1 米好き、パン好き、麺好きの地域分布

注) 二人以上世帯の支出額（2019～21年平均）による。地域分布は県庁所在市順位が最も高い品目で区分。埼玉はパンと麺が同順だが、パンに区分した。

資料) 家計調査

が安定的に行えるようになったからであり、そう歴史が長いわけではない。もともとは麦やソバ、雑穀を重視した食文化だったわけであり、食の好みなどは食生活の長い蓄積によるものだと考えられるので、そうした意味では、東北が米好きというより麺好きであるのは不思議でないともいえよう。

米、パン、麺ではないもうひとつの炭水化物食品にお好み焼きやたこ焼きといった小麦粉を溶いたものを鉄板で焼く食べものがある。ここではデータを示していないがお好み焼きの類は圧倒的に西日本、特に関西で好まれており、やはり地域性が濃厚である。



図2 地域別の米・パン・麺構成の変遷

注) 二人以上世帯の1世帯当たり品目別年間支出金額の割合。1963～65年は返還前なので那覇市のデータなし。
資料) 家計調査

東日本はラーメン好き、西日本は、そば・うどん好き

このように、西日本のパン好き、米好きに対して、東日本では麺好きが目立っている。

しかし、麺といっても、うどん、そば、パスタ、ラーメン、カップ麺などと種々である。東日本の麺好きは何によっているかを確かめるために、家計調査で外食の麺として支出額データが存在する「日本そば・うどん」と「中華そば」に関して、図1と同じ手法で地域マップを作成した（図3参照）。

全体的な傾向としては、東日本は、中華そば（ラーメン）好き、西日本はうどん・そば好きという傾向が明らかである。

つまり、東日本の麺好きは、うどん・そばというよりラーメン好きによっているのである。

若干例外的な地域分布として目立っているのは、東日本の中でも北関東の群馬、埼玉、茨城で日本そば・うどん好きとなっている点である。これは北関東のうどん文化をあらわしているよう。

なお、また、東日本の中でも山形は中華そばで1位であるのに加え、日本そば・うどんでも4位とまさしく麺好きの地域特色を明らかにしている。

ここでは外食の麺しか掲げていないが、食材として購入する内食の麺のデータも調べてみると興味深い結果が得られる。

信州そばで名高い長野は、外食では、日本そば・うどんが19位と中華そばの9位を下回っており、

消費支出額トップ10		
	日本そば・うどん	中華そば
1	香川	山形
2	静岡	新潟
3	群馬	宮城
4	山形	栃木
5	岐阜	青森
6	栃木	秋田
7	島根	福島
8	愛知	石川
9	佐賀	長野
10	石川	岩手

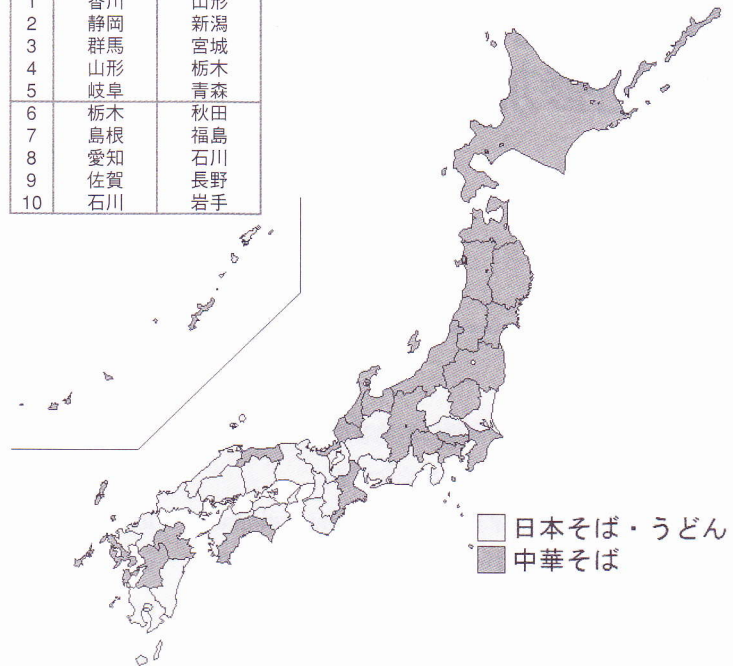


図3 好きな麺（外食）の地域分布

注) 二人以上世帯の支出額（2020～22年平均）による。地域分布は県庁所在地市順位が最も高い品目で区分。同順の場合は表の順による。

資料) 家計調査

ラーメン圏に区分されている。しかし、内食では「うどん・そば」の支出額が6位と高い。信州人は、そばは家で食べ、外食ではむしろラーメンを好んでいるらしい。北陸地方も同様の傾向にある。

長野や北陸と正反対なのが静岡であり、内食では中華そばが5位と多いのに、外食では日本そば・うどんが香川に次ぐ2位となっており、麺好きである点は同じであるが、長野と反対の外食と内食の使い分けを行っているようだ。

長野や静岡といった東のラーメン圏と西のうどん・そば圏の中間に位置する地域では内食と外食を使い分ける微妙な食行動が見られると解されよう。